『教育手帖』一九四八年八月号（日本書籍）

知識は言葉では与えられない

矢口　新

私の小学校時代の理科の教科書は暗記しやすく書いてあった。「さくらの花は、花びらが五枚、めしべが一本、をしべが云々」というように整然と書いてあった。私たちはもう理屈ぬきで一生けんめい暗記したものである。中学校になると植物、動物、物理、化学などの厖大な教科書を、同じように暗記させられた。何頁の何行目に何と書いてあったかまでおぼえようとした。そして今は殆んど忘れてしまった。理科に限らず地理、歴史も皆そうであった。

それに比べると近頃の教科書は随分かわったものである。暗記することは書いてない。こんな実験をしてみなさいなどと書いてあるから暗記はむだである。こんなことを考えてみたらどうかなどと書いてある。それに従って実験や観察することができるから楽しく自然の学習ができるであろう。社会科などもこれこれこんなにして見学した。こういう風にしてこういうことがわかるなどと書いてある。こういう教科書を読んで自分もおなじように考えてみ、調べてみるということはやはり楽しいことであろう。

こうして実際に自然や社会に直接ふれて、自分の頭で整理していったことは、頭の中に体系的に整理されるから忘れることはあるまい。むりに暗記しようとしなくともひとりでに暗記できるのである。昔の教科書のように一見体系的であっても、それは大人のもので、現実に自分でぶつかって、自分の頭の程度に適したように整理したのでない。なんとなくぴんと来ないものがある。それをただがむしゃらに読書百ぺん意自ら通ずというわけで暗記するのだから能率のわるい話である。教科書が体系的に書かれても基礎がない子どもには必ずしも体系的には入らないのである。むしろ無意味な言葉の連続としてしかうつらないのである。だからすぐ忘れてしまう。

新しい教科書ができてきたのは、このように考えると、本当に人間に物事をわからせようという考え方のあらわれだということができる。ものにふれて、即ち自然や社会にふれて本当に自然や社会を己れのものにしている人間を育てていくという真の教育に一歩近づいている。思えば過去の教育はむだなことが多かったものである。ただ徒らに言葉だけをおぼえる学習である。だから忘れるしおぼえていても役に立たない。本当に知識をもった人間はできて来ない。

このような教科書ができて来たのは、昔の非能率的な学習の仕方を根本的に変革する第一歩である。これからなすべきことは、このような教科書を使って、どのように自然や社会の現実にふれさせて学習をさせるかという方法を考えることである。今の教科書はそのことを前提としているのである。だから今の教科書をただ読ませておくといった教育は全然成り立たないものなのである。そこに新しく教材を充実するという問題が起って来るのである。理科の教科書でも、社会科の教科書でも、多くの教材に子どもが直接ふれて、しんみりと学習して行くように、学習

の指針として書かれていることは一目瞭然である。本当に自然や社会を理解しようとするには、このようにして自然や社会を教材として、その見方、考え方を教科書でおしえられつつ学習するのが当然であろう。

視聴覚教育などという妙な言葉がはやっているが、その本質的な考え方は、上に述べたような自然や社会の現実を言葉でなく、事実の教材として子どもに提出する方法を言っているのである。社会科が出現した頃、一時現場学習とか見学などがはやったことがあるが、これも子どもに現実を教材として与えて、そこで社会を考えさせようという考え方のあらわれである。所がその頃、教師はそういう教材を使用して子どもに何をみせ、何を考えさせるか、即ち社会の姿を分析させるというようなことに慣れていなかった。そこでただ現場へ行ってうろうろと漫歩をするだけに終ってしまったのである。それが最近反省されてはやらなくなってしまった。しかしそれではいけないので、やはり社会の現実の場面で社会の法則を考えることができるように指導しなくてはならぬのである。

しかし社会の現実をみることができる、ただ目で見るだけでなく、そこに社会の素型をみとめることができるのは、相当な高度な眼である。何しろ現実は様々な要素の複合体であるから、種々な見地が成り立つのであってそれを整理して理論をくみたてるのはむずかしいことである。それは自然についても同様なことが言い得るのである。

そこでこの現実を半ば抽象整理して、今考えようとすることに直接必要のないものは省略して、見やすくして教材として提出することができたならば、学習には有効であろう。そういう役目をはたすものの中、重要なものとしていわゆる視覚教材といわれるものがある。就中、映画、幻燈などは最も有効な教材提出の手段と考えられよう。

幻燈は自然や社会の静止した一断面を、映画は動いている現実を動くままに把える、という差異はあるけれども、何れも写真というメカニズムを通して動く現実をとらえ、これを繰返し観察することを可能ならしめているのである。しかもあらゆる場所にある現実をも、教室の中に持ちこむという可能性も持っている。即ち時間や空間を克服して、遠い所にある現実をも、また瞬時に流れ去る現実をもとらえてこれを教材とすることができる方法をもっているのである。しかも現実を現実のまま教材として意図的に構成することができる。言葉の根源である事実を提出するのである。

このような教材提出の方式があるのに、これを使用しないのは、教育を徒らに前世紀的なものにしておく所以であろう。しかし現状は決してこういう期待にそうものではないようである。教師は依然として教科書講読学習の惰性からぬけ切らないでいる。社会はこのような教材を製作することに殆んど無関心のようである。即ちこのような新しい教育の方式をとることになれば、今までとは異なって機械や道具を使用しなくてはならぬ。教材も特別に製作しなくてはならぬ。それにはやはり相当の努力も必要であり、経済的な基盤も必要である。そういうものを克服して新しい教育方式を実現する意欲が現代社会には欠如しているようである。合理的に考えれば、大した問題はないのだが、従来の教育方式の惰性に安住して惰眠をむさぼっている方が楽なのである。

この状態を打破する方法の一つとして、私は教科書と結合した教材を教科書会社が製作して提供してくれるのがいいと思う。私は教科書会社が、視覚教材を製作提供してくれるのを待っている。それが新しい形の教科書をつくった教科書会社の次の仕事でないかと思っている。

（国立教育研究所員）